

和紙だより

■片山寛美さん(和紙ショップオーナー)
「一緒に汗を流そう」

越前和紙への提言



■片山寛美

和紙ショップオーナー。1986年渡米後、Infusion社を経て、1989年、米国カリフォルニア州サンタモニカにて、日本の和紙を扱う「ヒロミ・ペーパー・インターナショナル」を創設。日本の和紙製造者との幅広いネットワークを活かし、米国のアーティスト、文化財修復者、デザイナー、書籍関係者に、和紙を提供してきた。米国一の品揃えを誇る和紙店として信頼も厚く、和紙に関する情報提供や相談にのり、スタディツアーなども企画。年4回ニュースレターを発行。アメリカの和紙を巡る話題にも事欠かない。

<http://www.hiromipaper.com/>

元々私は現代美術出身なのです。戦後、兵庫県芦屋で「具体美術」という前衛的な芸術運動が起きました。関西を中心としたアートムーブメントで、フランスの批評家タピエに紹介され、国内よりむしろ海外で評価されています。舞台あり、パフォーマンス、ハプニングあり、インスタレーションなど、今では当たり前の現代美術のジャンルを先駆けて挑戦したのもこのグループです。

七〇年代京都で学生だった私は、この運動に触発され、抽象画や造形作品を制作していました。自分の作品に、何か普通のキャンバス以外の紙が使えないかと模索していた頃、友人の紹介で美濃の楮紙に出会ったのです。本美濃の古田行三さんと奥さんの小夜子さんです、今でも紙が大好きなのは、このご夫婦のお陰だと思います。

一九八六、八七年にカリフォルニア大学・サンタバーバラ校の客員講師に招かれました。そこには七〇年代からすでに芸術学部の中にペーパーアートの部門があり、和紙についての講義とワークショップを依頼されたのです。当時アメリカにはいい和紙を売っている所が多く、種類もごく限られたものだけ、和紙の知識も不正確、情報も大変怪しい、ということが段々分かつてきました。何しろ、



30余りの現代アートギャラリーなどが並ぶサンタモニカ、ベルガモットアート基地センターにある「ヒロミ・ペーパー・インターナショナル」

ベトナムの生春巻きではあるまいし、今でも和紙のことを「ライスペーパー」と呼ぶ人がかなりいるのです。(笑)。

和紙との出会い

最初のうちは、必要な人に、個人的に日本の和紙を買ってあげたり、日本語の和紙の情報を英訳してあげたりしていました。フライデルフィア美術館の修復師の友人からは、「修復師を沢山紹介してあげるから、日本のいい和紙を提供しては」と励まされましたし、当時、セザンヌのスケッチブックの修復に取り組んでいた友人には、楮百%の軽くて強い薄美濃を紹介し喜ばれました。それで、一九八八年、本美濃、薄美濃、典具帖紙を主に和紙輸入業を開始しました。同時に、和紙の情報を西洋人に正確に伝え、日本の産地との橋渡し的な役割を担いたいと考えたのです。

紙の文化が違うと感じさせられたのは、例えば、絵の伝統が西洋はやはり油彩ですか

かを探っています。ベースを設置して実際に修復用和紙を展示し、見てもらうこともあります。

全米一の品揃え

現在、商いの二本柱は、美術品や文化財の修復用和紙と美術用の和紙です。カタログには、和紙の基本的な製造工程、歴史、洋紙との違いをインポートで解説し、商品の紙の名前、コード番号、値段、サイズなどを入れ、紙の作者とその紙の特徴を解説しています。アメリカは、カタログ販売の歴史が長いのでカタログ作りには力を入れています。サンプル帳もできるだけ産地から破断紙などを提供していただき、こちらで作つて、常時十冊は在庫



●ショップ内部

しています。百%のカラー雁皮紙や楮紙なんて置いているところは他になくて、三年かかってやつと売れるような和紙も我慢強く売っていますから。

●一緒に汗を流して

私は製造者とエンジニアの橋渡し役として、常にニーズを探り、今の需要にあつた形や値段で対応できるかどうかを考えています。お客様の要望で、今までと違った和紙を作つていこうとか、値段の交渉など産地の方に働きかけても、時には余りに反応が鈍いので、「頼みすぎているのかなあ」「こんな小さなオーダーいらぬのかなあ」と気落ちする時があります。日米の文化交流等で、よく人間国宝の方などがみえますが、チヤホヤされるだけでは交流する意味がないません。若い方も大いに交流に加わり、技術や伝統を正確に伝えながら、一方でマーケットのことを識り、ビジネス感覚を養うことが必要でしょう。おんぶにだっこで、何から何まで問屋さん頼みだけではいけません。一緒に汗を流して新しい紙を開発していくうという姿勢が重要で、そうすると、手の方も勇気が出るというのです。

発行しているカタログと
ニュースレター



■第二回東アジア紙文化財保存修復シンポジウム開催 —文化をつなぐ紙の路—

会場の九州国立博物館



二〇〇七年九月七、八日、福岡県太宰府市の九州国立博物館で、文化財修復と紙をテーマに国際シンポジウムが開催された。この国際会議は、文化財に紙製のものが多く、紙の文化を共有している中国・韓国・日本の研究者や修理技術者が、紙文化財の歴史、製紙技術、修理事例の情報交流を通して、自国の紙修復保存技術の向上に活かそうというものの二〇〇六年、北京で第一回目が開催され、今回の第二回会議のホスト国は日本、来年は韓国・ソウルで開催予定だ。参加総数は三三〇名余り、うち国内参加者二五〇名、海外参加者五六名（中国、韓国、イギリス、タイ、アメリカ）となり、活発な研究発表と修復保存事業の現在抱える課題についても率直な問題提起がなされた。

●第一部 基調講演

- ・潘吉星（中国科学院自然史研究所）——金三基（韓国国立文化財研究所）——朝鮮時

代の製紙手工業と製紙技術

・湯山賢一（奈良国立博物館）——日本における紙文化の変遷

子（国宝修理装潢師連盟）

六人の修復師が、各国の興味深い修復事例を紹介。最近では科学分析が必要不可欠になつてゐるが、韓国の発表者は、カビ、昆虫、菌による紙の劣化や欠損を紹介し、なかなか科学的な分析だけでは修復が難しいので、むしろこれらの要素を防ぐ方策も修復計画に入れておく必要があることを強調。又、日本の発表者は、竹などの他、桑、よもぎ、小麦、大麦、藁、柳など多岐にわたつていて、気候の変動や政変などで、良い原料が得られない時には、人々は紙の混合比率を変えたり、代用品で工夫した。又、紙は知識の蓄積、記録、コミュニケーションの手段として大変重要な媒体であつたため、時の権力者は、紙の製法や職人を管理してきた。従つて、紙の組成、混合割合、製紙技術を子細に調べることによって、国、時代、紙料がおおよそ特定できる。紙文化財の修復作業には、こういった時代考証が欠かせないと、講演者は文化を伝える紙の重要性を示唆した。

●第二部 事例報告

一、敦煌遺書の保護と修復——杜偉生（中国国家図書館）

二、「朝鮮王朝寛錄」の抄紙技法分析および劣化挙動の評価——趙炳默（江原大学校）

三、水の使用を制限した修理の事例報告——紙本墨画 維摩居士像——竹上幸宏（国宝修理装潢師連盟）

四、古籍学の量化研究法および応用——馬芸（陝西歴史博物館）

五、紙類遺物の保存処理と状態調査——鄭小英（韓国国立文化財研究所）

六、劣化した宋版本の修理について——森香代

●第三部——パネルディスカッション・製紙技術と修復技術の各国の現状について

紙修復の分野では、日本は、いわゆる人間国宝の認定制度や主催者でもある「国宝修理装潢師連盟」などの組織化でも、やや各国に先んじていて。しかし、後継者不足による修復技術の伝承の危機、伝統紙産業の衰退、修復事業を巡る社会的事情などは、三国とも似通つており、今後の大きな課題である。



会場では修復用和紙や道具の展示・即売も

きる工房もあり、バックヤードはまさに技術研究所の面持ちであつた。なお博物館では、合わせて特別展示「文化を伝える紙の路」と題した展覧会も開催された。



中国、韓国、日本の修復研究者による研究発表とシンポジウムの模様

博物館パックヤードの修復技術を見学するワークショップの模様



と参加者は口々に言う。ひとまずは、この様な紙修復交流のための国際間プラットフォームを作り、定期的に情報交換をすることが重要だととの意見に全員賛成の意を表した。

●関連ワークショップ—美術館修復現場の見学会

今回の主催者のひとつでもある九州国立博物館の全面協力を得て、日頃見ることができない博物館パックヤードの修復現場の見学会も行われた。参加者は二班に分かれ、博物館職員の案内で非接触光学式三次元デジタイザ、携帯型デジタルマイクロスコープ、X線CTスキャナ装置などの実演を見て、この分野に思ひの外、ハイテク機器が多く導入されていることに驚いていた。中には、一億を超える高価な装置もあり、その多くは医療用機器だといふ。又、紙修復に適したことでの

十キロを用意。乾燥させ、一メートル余りにそろえた原料は、二、三ミリにさき、撲つて細い糸に仕上げ、機織機で布に仕上げた。穀紙、麻紙、斐紙も、機械を使わず、叩解や水供給も手で行い、正倉院にある紙と同じ色を出すため、草木染めにした。植物染料らしい落ちついたいい色が出た。

■こしの都千五百年プロジェクト—古代布、古代紙の復元

春号でも紹介した「繼体大王即位千五百年祭」をバネに、紙の未来を展望しようと、和紙の里・越前市今立地区で「古代布、古代紙の復元」プロジェクトが春から進められていたが、十月六、七日を中心とした成果が発表された。

●復元作業

日本の紙の源流は、楮の皮から木綿を作つていく過程で、派生的に生まれたとされ、古代では織りと和紙の技術は深い関わりがある。復元は、紙のルーツとも言うべき古代布・木綿ができるだけ当時の技術で製作する一方、正倉院文書にも載つてゐる越前の奉書や鳥の子紙の源流をたどつて、穀紙、麻紙、斐紙を漉くことだ。



越前和紙の技法を伝える貴重な紙も展示された

●復元の意義

プロジェクトを指揮した石川満夫さんは、「我々が、現在持つてゐる千年も経た技術を頭に置いていると、古代の紙はなかなか

作れないことが分かりました。つまり、思いこみがありすぎるわけです。初心に返つて、新しいものを開発する時は、思いこみを捨てよ、思いつきを拾え、と言う所以です。今回参加した若い方達にそういうことを感じてもらえたらと思います。」と意義を語る。

■「素の紙展」二〇〇七 東京展開催



伝説の舞踊とコンサートで、イベントは最高潮に達した。

十キロを用意。乾燥させ、一メートル余りにそろえた原料は、二、三ミリにさき、撲つて細い糸に仕上げ、機織機で布に仕上げた。穀紙、麻紙、斐紙も、機械を使わず、叩解や水供給も手で行い、正倉院にある紙と同じ色を出すため、草木染めにした。植物染料らしい落ちついたいい色が出た。

復元された古代布と古代紙は、六日、岡太神社に奉納され、夜には子供達が思い思いに絵を描いた和紙の灯籠が大瀧神社までの参道沿いに並べられた。神社では「伝統文化交流

祭」が行われ、幻想的な紙祖神「川上御前」さんは語る。



今回、復元に参加したのは、千五百年祭実行委員会を中心、福井県和紙工業協同組合越前和紙青年部、各漉き場、月尾ており工房の有志と地元ボランティアの方々。徳島県ではコウゾで「木綿（ゆう）」を作る伝統が受け継がれていることから、復元の参考にしようとして、春には作業に先立ち、現地に研修にも行つた。

材料の調達は主に青年部会が担い、コウゾの木の刈り取り、蒸し、皮はぎなどを経て約

トマチック変速機や携帯電話に使用される基盤など、最先端の紙技術を紹介する展示コ

トマチック変速機や携帯電話に使用される基盤など、最先端の紙技術を紹介する展示コ

トマチック変速機や携帯電話に使用される基盤など、最先端の紙技術を紹介する展示コ

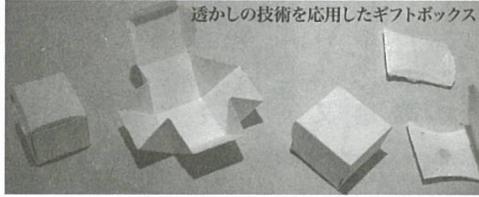


LEDを漉き込んだ照明器具



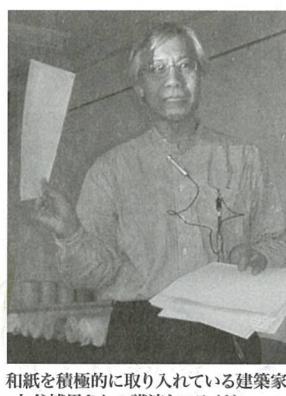
会場風景

透かしの技術を応用したギフトボックス



和紙などを、施工サンプルと共に展示。又、証券用に利用されていた「透かし」の技術を応用したグリーティングカードやギフトボックスなどのギフト商品、気分に合わせて和紙を取り替えることのできる照明器具やLED(発光ダイオード)を漉き込んだ和紙照明器具などのインテリア小物の他、漉き場独自の技術を用いた新作和紙など、合わせて約二十点を展示了。

提案商品のグリーティングカードやギフトトックスは、後加工なしに、紙漉きそのものの工夫により制作できるもので、越前の技術をうまく生かしています。今後小ロットのオリジナル・ウェディングカードやギフトのアイテムとしても応用できると、若い方には人気がありました。



和紙を積極的に取り入れている建築家
・丸谷博男さんの講演とスライドショー

十二日には、同会場にて「和紙の和紙たる所以、その生かし方」と題してミニセミナーを開催。自然素材の魅力を大学で講義し続け、和紙を積極的に建築に取り入れている建築家、丸谷博男さんに和紙インテリアの魅力と手掛けた施工例などを、スライドを交えながら講演して頂きました。和紙の白さに限らず、「白」は、建築家の視点から見るとキーワードであると丸谷さんは考えています。世界中の住宅

以降、その生かし方」と題してミニセミナーを開催。自然素材の魅力を大学で講義し続け、和紙を積極的に建築に取り入れている建築家、丸谷博男さんに和紙インテリアの魅力と手掛けた施工例などを、スライドを交えながら講演して頂きました。和紙の白さに限らず、「白」は、建築家の視点から見るとキーワードであると丸谷さんは考えています。世界中の住宅

銀閣寺南の法然院・方丈の間で京都工芸織維大学工芸科学研究所の大学院生による和紙作品の習作が、展示された。同校は二年前に学内に和紙工房を設け、学生の教育や研究に活用しているが、今回は和紙をゼミのテーマとして取り入れた。野口企由教授(インテリア)、中野仁人准教授(グラフィック)ゼミのデザイン科学専攻の大学院生が、模様を漉き込んだ和紙を使い、空間創りとインスタレーションに挑戦。野口教授は「先端的なデザインだけではなく、和紙のような伝統的素材を通して文化が育んだ美や可能性を感じとり、研究して欲しい」と言う。学生自らが型を使って立体的に漉いた厚紙や、薄く漉いた波模様の和紙を既成のベース和紙に貼り合わせたりしている。作品は空気・風・光などの

や二十世紀のインターナショナル・スタイルの建築にも、「白い素材はたびたび使用されてきました。丸谷さんは、和紙の「白さ」の魅力のひとつは、顕微鏡的に見れば韌皮纖維が絡まり合った立体構造にあると説かれます。立体構造であるからこそ、光が纖維と纖維の間を通り抜け、上の纖維の影が下の纖維に映り、陰影を創り出します。和紙の魅力的な白さの中には、この透過光と影の混じり合いがあり、一方の光を多方向に分散することと、光に柔らかさが生まれることにあります。事例スライドでは、この様な和紙の魅力を引き出した「ただの白い壁プロジェクト」を始め、氏が手掛けた和紙を使った設計例を紹介して頂き、よく使う和紙の扱い方についてもコツを伝授して頂きました。建築家らしい美学を伺うことが

九月十二日～十四日、京都東山連山の麓、銀閣寺南の法然院・方丈の間で京都工芸織維大学工芸科学研究所の大学院生による和紙作品の習作が、展示された。同校は二年前に学内に和紙工房を設け、学生の教育や研究に活用しているが、今回は和紙をゼミのテーマとして取り入れた。野口企由教授(インテリア)、中野仁人准教授(グラフィック)ゼミのデザイン科学専攻の大学院生が、模様を漉き込んだ和紙を使い、空間創りとインスタレーションに挑戦。野口教授は「先端的なデザインだけではなく、和紙のような伝統的素材を通して文化が育んだ美や可能性を感じとり、研究して欲しい」と言う。学生自らが型を使って立体的に漉いた厚紙や、薄く漉いた波模様の和紙を既成のベース和紙に貼り合わせたりしている。作品は空気・風・光などの

自然を身体全体で感じ取る「経験デザイン」的要素や、鑑賞の際の導線も考えて制作され、方丈の間、庭の自然、そして和紙がとけ込んだ場に仕上がっていました。



「光あやなす波」展会場風景

情報欄

●イベント情報

■「初漉き」

時:平成20年1月5日(土)

場所:卯立の工芸館(越前市新在家町)

■福井県の物産と観光展

時:平成20年1月24日(木)～29日(火)

場所:東京新宿京王百貨店

展示・即売あり

■福井県の伝統工芸土展

時:平成20年1月24日(木)～2月5日(火)

場所:東京池袋 「全国伝統工芸品センター」

展示・実演・即売あり

編集後記

この都のイベントで使われた直径3メートルもある大太鼓は、越前の紙製だというのには驚きました。夜の大瀧神社でのパフォーマンスも幻想的な光をうまく使い、「川上御前」がまるで透明人間のように見えて楽しめました。(よ)